

ここには

①圓山 武市(ブイチ) 記〔コピー記入〕

私 栄一 の父三郎の兄であり叔父に当たる 東京池袋 圓山 武市氏 の圓山家の系図に係る記述を記しておきます、武市氏が生前に書き残したものである。

父方の先祖父栄蔵は園部藩〔京都府船井郡園部町〕の藩士潮田家の次男として明治十七年六月三十日に生まれ、明治十九年、僅か二歳で圓山家の養子となった。潮田家は身分の高い藩のようで、園部に残された生家も相当な家構えで禄高もそれに相応しいものであったというのが父の口癖であった。父栄蔵が何の縁故で、圓山応挙の縁戚とは云え、当時は呑百姓でしかなかったであろう圓山家の養子となったのか今になると全く知る由もなく、祖父母に実子がなかった圓山嘉吉夫妻は先ず男児を潮田家の次男栄蔵を養子に、後日、長ずるに及び亀岡市曾我部町春日部の斎藤家の次女 あぐり を嫁として迎え、結婚させたのである。しかし、自分が武家の出身であることに限りない愛着と誇りとを抱いていたであろうことは、自分の表札には士族と書いて修性変わらなかったことから見ても、十分に推察されるのである。 かつて、妹の〔君子〕夫、故松本寿一氏が、私に何回か園部の先祖を調べてみないかお手伝いするからと言ってくれたことがあったが、優柔不断な性格と時間的に余裕のなさから決断しないまま今もつて何の手掛かりも得られず今日に至っていることは返す返すも残念で、子孫に伝える時期を全く失うことになった。 しかも、父のたった一人の兄 喜一氏 一家とは父の晩年に不仲となり、今もつて何の音信もなく唯一の親戚を失ったことは残念でならない。伯父喜一氏の生前、伯母からの聞き覚えによると潮田家親戚に当時も健在で、京都の武徳殿で薙刀の師範をしている老女子居られたことを何回か聞き及んだことがあるが、現在記憶に残っているのはその程度である。なお、・祖父は明治中頃長男 喜一を連れ 神戸で貿易商らしきことをしていたと聞いたことがあるが、詳細は不明で、祖父の死亡後であろうか伯父 喜一氏は洋服仕立てを身に着け、最盛期は京極の繁華街で洋服商を盛大に営んでいたが、家族の健康に恵まれず、夫人、長女等を相次いで結核を失い、商運も共に傾いていったようであった。 私(武市)の小学一年当時であったろうか、祖母に逢った印象が子供心にも鮮明に残っている。その第一回目は祖母が人力車に乗って穴太へ(曾我部町)来た時であった。当時半身不随の後遺症が残っていたのであろうか、不自由な片手で巻紙を支え毛筆で見事な草書を書いているのを見たこと。もう一回は船井部胡麻(当時祖母の自宅)へ私一人で尋ねて行った時の事。私が祖母に逢ったのはこの二回であつたように思う。色の白いとて上品な人であった。

②母方の先祖

母あぐりは亀岡市曾我部町字春日部の斎藤家の次女として明治二十二年十二月二十三日に生まれた。昔の言い伝えに女子が二人生まれた場合、次に男の子が欲しい時は二番目の女の子の名をアグリと名付けると次の子は必ず男の子が生まれるといったそうである。その通り、斎藤家の場合も三番目に長男久太郎を授かったのである。斎藤家は何代か前までは、相当世間に知られた宮大工で、国内の相当有名な神社、仏閣の多くの建築に参加していたようであるが、その永く続いていた宮大工の旧家としての体面も祖祖父の代迄で、祖祖父の晩年に生まれた祖父を祖祖父が溺愛するに及び、為に祖父は終生家業を放置し職に就かず、終日酒色に溺れ、一代で田畑山林を売り尽くし無一物の水呑百姓への途を辿ることになったようである。 しかし、その落ちぶれた斎藤家も祖父の次男富次郎がとても勤勉化で、尚且つ強運の持ち主であったため、零落した生家を立て直し、その後分家し、大阪府豊能郡東能勢村でトヨタ自動車の部品工場を建設し、村一番の資産家にまで成功することとなった。

③幼児期の記憶(武市)

幼児期の記憶としては、あまり鮮明なものはない。成人してから母が、余程嬉しかったのであろうか、満一歳頃に、達者に育つようにとお灸をすえるためにおぐるすへ行くのが習慣になつているようであつたが、そこで私のことを大層褒めてもらったそうで、そのことを何回となく私に話したのをよく記憶している。母は、それ以来、私の成人するに伴い、自分の漠然とした夢をかけていたのであろうか。

④児童学生時代(武市)

田舎の小学校ではマアマアできた方ではあつたらしいが、ずば抜けるという程でもない。ごく普通の大人しい子供として成人して来たようである。母が密かにかけていた私に対する夢も一向に実現する気配もなく過ぎて行つたのであろう。やがて曾我部村立尋常高等小学校の課程を終え、続いて府立亀岡農学校に進むのであるが、二年生の一学期の途中で、学業を続けると家事手伝いが両立しないという理由で中途退学をすることになった。これは結果において、私の運命を大きく変えることになったような気がする。

⑨軍隊時代(武市)

私は昭和六年兵として昭和七年一月十日に福知山歩兵第二十連隊に入隊することになつていたのであるが、私の運命を変える人物が入隊直前に私の目の前に現れるのである。その人物は隣の太郎さんであつた。彼は小学校では、私の一年後半であつたが、平素は学業を始め、極めて目立たない極めて大人しい少年であつた。頭は良かったであらう。京都府立三中から陸士へ進んだのであるから。私が逢つたのは、彼が見習士官になる直前位であつたろうか、その太郎さんが休暇で実家に帰っている時に偶然に逢つた。そして私に現役を終えて除隊後帰郷して百姓をせず、入隊したならば、直ぐに下士官志願するように、そしてその助言によって入隊後の方針を定め、その道を進むのであるが、それは両親も賛成してくれたのである。一方、その太郎さんは陸士卒業を目前にして精神に異常を来し、将来、家庭大悲劇の原因となるのであつた。そして私は、その太郎さんが異常な変化をしているということは全く知る由もなく太郎さんが熱心に進めてくれた道を、忠実に懸命に進んでいたのである当時、下士官の道は志願者の中から入隊一年後の者を選別して一年間豊橋の教導学校に入校させて養成するのと、入隊一年後の乙種幹部候補生をそのまま隊に残して下士官にするのと、もう一つは兵隊の優秀な者の中から選んでそのまま自分の隊の下士官に任官させるという三種類の方法があつたのである、私はそのうちの第一の方法を選んだのであつた。当時の陸軍の満州事変が勃発し、急速な軍備拡大を必要としたようである。従つて、昭和八年に伍長任官した我々も教導学校を卒業した二十名を中心に乙種幹部候補生と上等兵から任官させた者を合わせて合計四十余名の多数の任官者を必要としたのである。かくして部隊は昭和九年四月人員を戦時編成に充足し、初年兵の第一期の教育を修了し、一部の要員を留守舞台に残し、大部分は満州派遣要員として取り敢えず当時の満州国新京(長春)に派遣されたのであつた。当時の満州国派遣部隊は南満州鉄道の要地守備隊要鼻として、大隊を守備単位として独立守備隊をその他に派遣部隊が二個師団程度派遣されていたようである。

圓山 武市 記

、